

福井県の葬儀にまつわる食事について

岸松 静代・藤野 和美・森 恵見

(2014年2月3日受理)

A Research of Meal on Funeral Ceremony in Fukui Prefecture

Sizuyo KISHIMATSU, Kazumi FUJINO, Megumi MORI

キーワード key words

葬儀場所 (funeral place)、葬儀専門業者 (funeral director)

忌明け法要 (the final funeral ceremony for Buddhist)

緒 言

福井県は永平寺という全国的に名高い曹洞宗の本山を有している。一方、浄土真宗の10の宗派のうち4宗派の本山が県内に存在することから、県民の8割くらいが浄土真宗門徒という真宗王国でもある。こうした背景から、同門の信徒が近隣の人達で「講」という組織を作って仏教行事を助け合いつつ行う風習が続き、比較的丁寧に仏事が営まれてきたようである。

しかし、親戚、近隣住民、同門の門徒の手をかりて自宅で行ってきた葬儀も、時代の流れの中で自宅から寺や専門業者斎場に場所を移し、近隣の手伝いを極力少なくするようになってきた。それに伴い葬儀にまつわる儀式や食事も簡略化され、様変わりしてきているようである。そこで、葬儀にかかわる食事の推移について資料収集するとともにアンケート調査を実施して、福井県における葬儀にまつわる食事の変遷をみてみた。

方 法

平成21・22年に実施された日本調理科学会特

別研究の行事食の全国調査から葬儀に関する調査結果を抜粋してみた。

次に福井県内在住者を対象に平成24年8月～11月にアンケート調査を行った。内容は、葬儀場所の変化、通夜から葬儀までの食事、葬儀後の食事、忌明け法要後の食事などについてである。その結果を宗派及び地域別に集計分析した。平成17年に実施した同様の調査の同じ設問に関しては平成17年と24年の比較も行った。

また、葬儀場所の地域による違いを検証するために、朝日新聞掲載のお悔やみ欄から、平成23年7月1日～平成24年6月31日の1年間の葬儀場について集計した。

結果及び考察

1) 日本調理科学会特別研究の全国調査

平成21・22年に「調理文化の地域性と調理科学」というテーマのもと、行事食と通過儀礼に供される食べ物について全国で調査を実施した。調査総数44,235名のうち、調査した都道府県に住んでいる人は24,428名であつた。その居住地域に10年以上住み続けている人は14,907名であつた。(表1)

表1 県別の調査対象者と葬儀経験者（人）

	該当地 在住者	10年以上 居住者	葬儀認知者	葬儀経験者
北海道	625	485	480	449
青森	715	590	550	505
岩手	170	111	107	91
宮城	728	465	453	413
秋田	206	166	140	116
山形	117	58	56	51
福島	259	189	181	169
東京	1838	363	353	299
神奈川	161	88	77	61
埼玉	40	40	40	40
千葉	671	309	296	258
茨城	514	436	398	336
栃木	147	131	127	117
群馬	307	181	177	154
山梨	109	49	49	48
新潟	536	325	317	284
静岡	215	147	139	114
長野	845	575	557	497
富山	436	377	362	314
石川	749	685	576	504
福井	458	416	388	335
愛知	2976	1978	1881	1636
岐阜	1050	558	539	471
三重	645	528	486	421
大阪	537	335	319	293
兵庫	444	293	267	217
京都	394	187	185	175
滋賀	412	155	144	124
奈良	574	223	206	181
和歌山	612	212	194	160
鳥取	342	189	176	146
島根	225	117	115	106
岡山	720	355	340	297
広島	846	489	472	436
山口	206	88	86	76
徳島	437	218	202	183
香川	256	205	200	183
愛媛	119	85	85	79
高知	194	159	148	133
福岡	1001	646	597	545
佐賀	350	137	136	122
長崎	206	127	122	110
熊本	536	384	365	330
大分	335	197	188	163
宮崎	264	173	159	154
鹿児島	646	484	468	423
沖縄	255	199	192	176
計	24428	14907	14095	12495

この14,907名を対象に葬儀の項目（葬儀の認知、葬儀の経験、精進料理と精進以外の料理の喫食経験等について）の回答を地方別に集計し比較してみた。

①葬儀の認知率は全国で95%、葬儀の実施（経験）率は89%であり、福井県は認知率93%、実施率86%であった。葬儀は死者を弔う儀式として全国で認められ定着していた。

②葬儀に精進料理を食べるのは、全国で69%であり、九州・沖縄地方と東海・北陸地方が喫食割合が高かった（図1）。精進以外の食事は関東地方と北海道・東北地方が多かった。

③料理の調達法についてみると、関東地方は

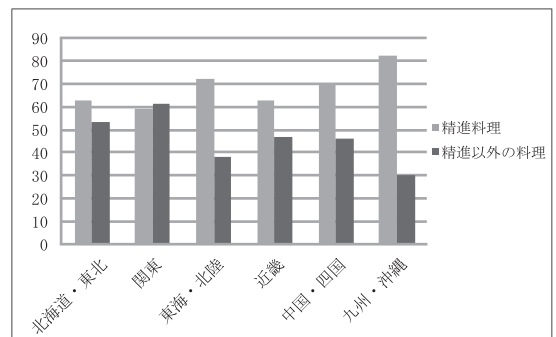


図1 葬儀の食事内容

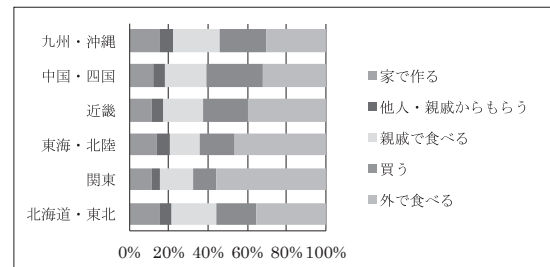


図2. 精進料理の入手法

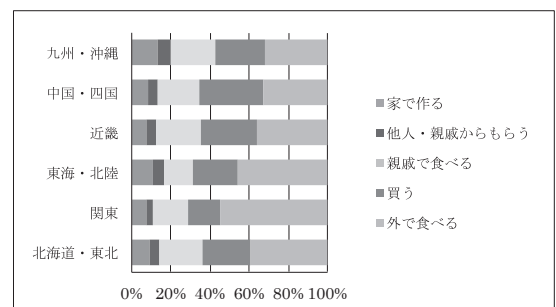


図3 精進以外の料理の入手法

家で食べる、親戚で食べるが少なく外で食べるが多い。住宅事情も関係するのかもしれないが、葬儀に親戚の手を煩わせずに外食する傾向が強いようである。北海道・東北や九州・沖縄地方などでは家で食べる、親戚で食べる等が多く、昔ながらの親戚一同で見送る葬儀がなされていることが示唆された。

また、精進料理と精進以外の食事を比べると、家で食べるが精進以外になると2～9%も減少し、代わりに買うが増加する傾向がみられた。

しかし、精進料理なのか、精進料理でないのかの設問は、葬儀のどの時間帯の食事なのかははっきりしないので、余り正確な答えとはいえない。福井県でも御遺体が存在する通夜～葬儀までは精進料理を食べ、葬儀終了後の食事は通常の日本料理を供する所が多いので、回答者により差が出るのではないかと考えられた。精進料理以外の食事で特別な料理の記載は見当たらなかった。福井は東海・北陸地方に入っていて、その中で平均的な傾向を示した。

2) 福井県のアンケート調査

福井県内在住者のアンケートは203名の有効回答者で回収率は68%であった。福井県を5地区に分けて集計分析した。宗派は浄土真宗68%曹洞宗18%その他14%であった。平成17年の調査では、有効回答者135名、回収率69%であった。5地区の人数を表2に示した。宗派別、地区別に集計分析したが、有意な差はみられなかった。

表2 回答者の属性

地 区	平成24年	平成17年
坂 井	48	27
福 井	80	82
奥 越	15	5
丹 南	27	21
嶺 南	26	0
そ の 他	7	0
計	203	135

①最近の葬儀場所について

最近行われた葬儀会場について尋ねた。平成17年は自宅が14%であり、公民館26%専門業者会館47%であった。平成24年には自宅が6%に減少し78%が専門業者会館になって、寺や公民館の割合も減少していた(図4)。

こうした葬儀場所の変化があったと回答したのは、平成17年には75%、平成24年には72%であった。変化したと答えた人にどう変わったのか尋ねた結果を図5に示した。

平成17年は自宅から寺5%、自宅から公民館19%、自宅から専門業者会館50%と自宅から他の会場への変化が75%を占めていた。しかし、平成24年には自宅から寺や公民館という割合がほとんどなくなり、寺から専門業者会館、公民館から専門業者会館への変化が増えて96%が専門業者会館へと代わってきていた。こうした変化がいつ頃起こったのかの設問では、昭和50～60年頃に自宅から寺や自宅から公民館という流れが起きていた。この背景には、核家族の進行で田の字の広い座敷のない家が増加したことや、お手伝いの人をお願いするのも勤め人の増加で仕事を休む必要がある等の事情があった。寺、公民館を使用すれば自宅の片づけもしないで良いので、お手伝いの人も通夜の日の夕方から葬式当日の1日あま

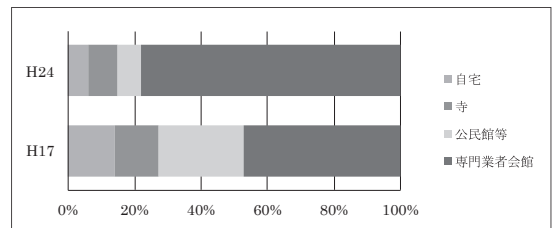


図4 最近の葬儀場所の推移

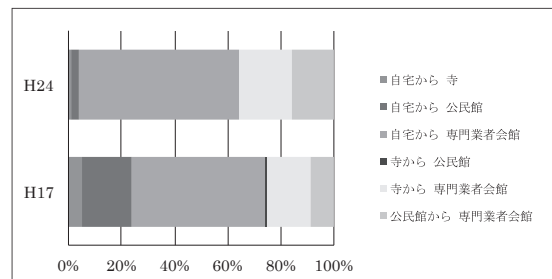


図5 葬儀場の変化の年代別推移

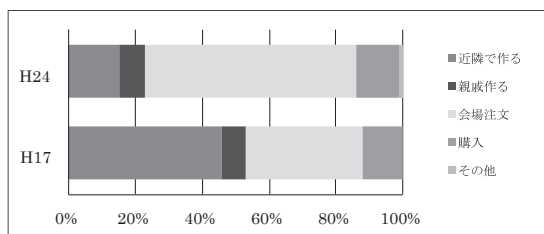


図6 通夜から葬儀までの食事入手法

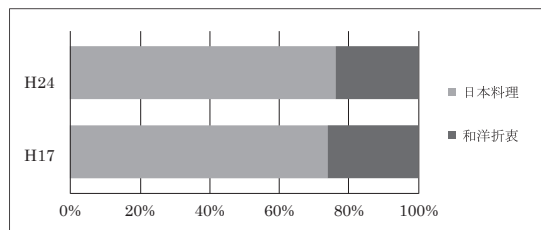


図8 葬儀後の食事の様式

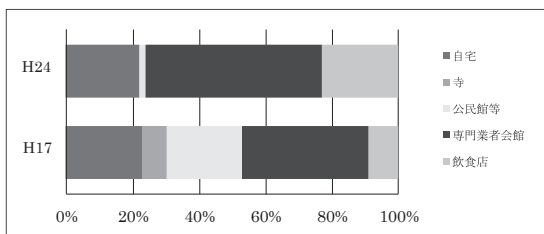


図7 葬儀後の食事場所の年代推移

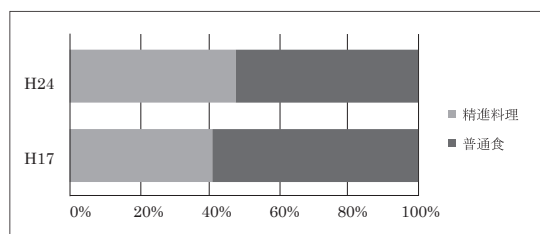


図9 葬儀後の食事内容

りのみ仕事を休めばよいのである。さらに平成5～10年頃に専門業者会館が次々に建設されて専門業者に委託の流れができたのである。専門業者に委託するとすべてを注文ですますことができるので、食事準備の女性の手伝いが不要となり、受付事務だけの手伝いでよいことになる。

②通夜から葬儀までの食事

通夜から葬儀までは、斎場に御遺体が安置されているので、精進料理を食べるのが、昔からの習慣であった。不浄が移らないように死者を出した家族は、食べ物を作らないので、近隣の人などに食事作りを依頼したものである。専門業者へと変化した平成24年には会場注文が増加し、近隣で作るが減少していた（図6）。

食事場所は、平成17年は自宅、寺、公民館で食べるが合わせて53%あったが、平成24年には24%と半減し、代わりに専門業者会館、飲食店などでの食事が増加していた。

すなわち、自宅、寺、公民館では近隣の人が作った食事を食べていたのに対して専門業者会館の食事は注文した食事であろうと思われる。

食事内容は精進料理が58%であった。全国調査では70%であったが、今回はそれを下回っていた。

③葬儀後の食事

葬儀終了後、葬儀に参列した親戚及びお手伝いの近隣の人を招いて食事会をするのが、恒例であった。平成17年には98%が食べていたが、平成24年には78%と減少していた。昔は葬儀終了後も精進料理を食べるのが当たり前であった。しかし、せっかく親戚一同が揃い、また再び揃うのが難しいので、葬儀の読経の最後に初七日のお経ももらったりしたため、精進以外の料理を出して、葬儀を手伝っていただいた近隣の人とも同席して慰労の食事としたものである。

食事の場所は、葬儀場所との関係が大きいと考えられる。自宅で食べるが平成17年は23%、平成24年は22%あるが、葬儀場所の結果と見比べると少なくとも10～15%の人は葬儀場所から移動して自宅で食事したことになる。専門業者会館で葬儀するのが増加した平成24年になると、会館でそのまま食事するか飲食店に出かける割合が増えてきたようである。

平成17年の調査でも、近隣の人への慰労の食事は、近隣の人が作った精進料理に魚屋・仕出し屋から日本料理を取って食べ、料理は黒の足つきお膳に並べ供卓したという¹⁾結果が出ている。戦前は足つきお膳を各家で持っていたが、戦後は魚屋からお膳も借りるようになった。食事場所が公民館になると、お膳は使用せずに長机に並べる

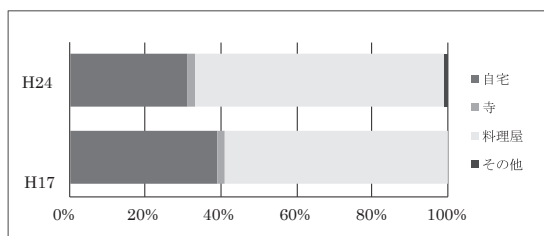


図10 忌明け法要後の食事場所

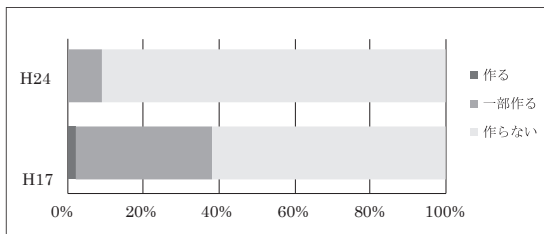


図11 法要後の食事の手作り割合

ようになったので²⁾ある。そうした変遷の後に、平成24年になると葬儀場所と同じ会場で注文したものを食べるか、場所を移動するのであれば飲食店にいくというように変化したものであろう。

食事内容は、日本料理が中心で和洋折衷も含まれている。精進料理が平成24年の方が増加しているのは、専門業者会館を利用することが増えたので、魚屋で注文していたのと違い葬儀用の食事がメニュー展開されていることによる影響ではないかと推察される。

④忌明け法要後の食事

死後49日を経過すると満願法要という忌明けの法要を行い、その法要後に食事を出す。

食事をする人と答えた人は、平成17年88%、平成24年には80%であった。

食事場所は自宅か料理屋であり、自宅での食事の場合、仏前のお供えも兼ねて精進料理を作り、それを加えて法要参加者にも提供したものと思われる。料理屋での食事になると精進料理を持ち込む事も出来ずに、作らないの割合が増加してきたと考えられる。(図10、図11)

以上のように、福井県でも葬儀は親戚や近隣の人の手から専門業者へと移行し、それに伴い葬儀や葬儀終了後の食事も、近隣の人の手を借りずに商業ペースで専門業者への注文や外食で済ませる

ことになってきている。アンケートでも精進料理とは何かがよく理解できていない回答があったりするので、なぜ精進料理を食べるのかといった仏教の教えが薄れてきているのかもしれない。

3) 朝日新聞からみた福井県の葬儀場

平成23年7月1日から平成24年6月30日の1年間、朝日新聞に掲載されたお悔やみ欄から葬儀場所を集計した。福井県内での死者は6779名であり、そのほとんどが専門業者会館で取り行われていた。

地区別にみると、嶺南では自宅、寺がまだ多く残っていて公民館などと合わせると30%は昔ながらの葬儀が行われていた。奥越地区では集落センターのような公民館が嶺南と同じくらい使われていた。福井地区は専門業者会館が最も多く使われており、葬儀の儀式的様変わりが顕著な地区であった。また、家族葬を行うので参拝者を断るという表現をしている記載が最も多かった。福井地区に隣接する坂井、丹南地区は福井地区と奥越、嶺南地区の中間にあたるものであった。

専門業者会館の多くある地域と少ない地域によりこうした違いが生じているものと思われる。福井地区の動きに他の地区が追随していく形で変化が起こっているようである。こうした流れから考えると、今後の葬儀の形としては、親戚家族のみで死者を送る家族葬が増加していくの

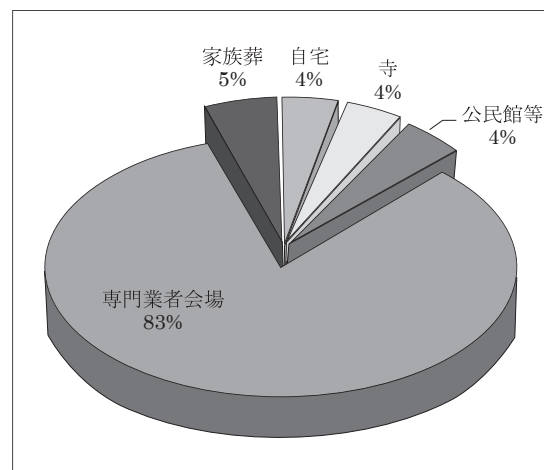


図12 県内での葬儀場所

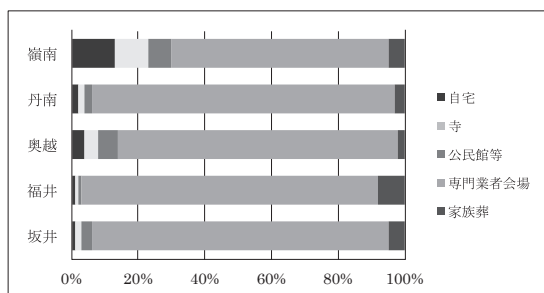


図13 地区別の葬儀場所

ではないかと思われた。

しかし、生前の死者を良く知る近隣の方々等の参列により、悲しみを分かち合い、故人との思い出や経験を語り合うことで家族が喪失の悲しみを癒すという精神的な機能があった⁴⁾ 葬儀が、家族葬という社会的には閉鎖した儀式で済まされた場合には、どうなるのか？ 家族の在り方や家族と社会とのつながりといった部分の捉え方がどのように変化していくのかということと強く関わる問題であるといえよう。

10年後位にまた同様の調査を実施して、その変化を検証してみる予定である。

要 約

人生の通過儀礼のひとつである葬儀とその食事の変遷について検討した。

- ①平成21、22年度の日本調理科学会が行った行事食の特別研究のデータから、葬儀に関する項目を抜粋し、地方別に集計分析した。葬儀の認知率は95%、経験実施率は89%であった。精進料理は全国平均で69%食べられていた。九州・沖縄地方と東海・北陸地方の喫食割合が高く、関東地方は低かった。
- ②平成24年と平成17年に行った福井県内在住者を対象としたアンケート調査の結果、葬儀場所

は専門業者会館が47%から78%に高くなっていた。平成17年には自宅から寺や公民館に代わっていく傾向にあったが、平成24年には専門業者会館が多く開館したこともあって利用が増加していた。

通夜から葬儀までの食事は近隣で作るが減少し、会場注文が増加した。また、葬儀後の親戚、お手伝いの人への慰労食は98%から78%と減っていた。日本料理か和洋折衷料理で、専門業者会館で注文して食べる関係からか精進料理がわずかであるが増えていた。

忌明け法要後の食事は、88%から80%に減少した。食事場所は自宅が減少し料理屋に出かけるが増加した。それに伴い料理の一部を作るが減少し、作らないが増加した。

アンケートからも専門業者会館を利用することで、すべて注文で済ませ、なるべく家族以外の人の手を煩わせない。だから食事注文や購入ですませるといった図式が明らかになった。

- ③朝日新聞掲載のお悔やみ欄から1年間の葬儀会場を集計したところ、83%が専門業者会館を使用していた。地区別にみると、奥越地区と嶺南地区は専門業者会館の利用が他地区より少なかった。福井地区が利用が最も多かった。家族葬の割合が福井地区が他の地区より多かったため、今後は家族葬が増加し葬儀そのものが社会性をなくし個人の行事となっていく可能性が大きいと思われた。

参考文献

- 1) 平成21,22年度日本調理科学会特別研究 「調理文化の地域性と調理科学」報告書 一年中行事と通過儀礼
- 2) 平成17年度卒業研究 「福井県の葬儀及び忌明けの食事について」
- 3) 平成24年度卒業研究 「福井県の葬送のかかわる食事について」
- 4) 中谷智一 「葬儀の機能—集団精神療法の視点から—」北陸学院大・北陸学院短大部研究紀要
- 5) 北陸の冠婚葬祭 p140～146